

第12回民俗学シンポジウム「秋田学」報告概要

「民俗文化財の根底にあるものー自然・風土と住民の思いー」

○鎌田幸男（ノースアジア大学 経済学部特任教授 雪国民俗館館長）

地域に生きる住民は、自然と風土の中で郷土へ愛着心を持ちながら逞しく暮らし、特色ある多彩な生活の文化を築いてきた。そこに形成された特有の文化には、暮らしの足跡や歴史、それに住民のそれぞれの思い（期待感、希望、生きる力、願い、信仰など）が刻み込まれている。

ここでは男鹿の地域に伝わる二つの国指定・重要（無形・有形）民俗文化財を採り上げる。1つは無形民俗行事のナマハゲ（昭和53年国指定、平成30年ユネスコの無形文化遺産）、他の1つは有形民俗の単材丸木舟（刳舟、昭和40年国指定）である。両文化財からは、男鹿の風土を基盤にした住民の暮らしぶりが読みとれる。こうした生活の文化財を理解するには、自然、人文、社会科学の諸相を含めた風土論的な視野からの考察が求められる。

本発表は民俗学を基点にしているが、ふるさと学（地元学）や地域学とも重複するところがある。「知の拠点づくり（秋田学）」に役立てたいものと考えている。